

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

石の寝屋

明石の海に眠る真珠を求めて



伝説 石の寝屋

明石の海に眠る真珠を求めて

紀行 石の寝屋古墳とその周辺を訪ねる

- ・明石海峡を渡る
- ・石の寝屋古墳
- ・岩屋の浜から松帆の浦へ
- ・岩屋神社
- ・絵島
- ・岩屋城跡
- ・伊弉諾神宮
- ・岩屋台場群と松帆浦

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

石の寝屋

明石の海に眠る真珠を求めて

今から1500年も前のことです。そのころの淡路島（あわじしま）は、「御食国（みけつくに）」とも呼ばれて、天皇がめし上がるさまざまな食物を、朝廷（ちょうてい）にさしあげていました。

ある年の秋、允恭天皇（いんぎょうてんのう）という天皇が、淡路へ狩りにやってきました。そのころの淡路には、大きな鹿（しか）や猪（いのしし）、そして鴨（かも）や雁（かり）などのわたり鳥がたくさんいたのです。ところが一日中追いかけて、どんなに矢を射かけても、たった一つのえものもありません。不思議に思った天皇は、その理由を占わせてみました。

するとイザナギ神社の神様から、こんなお告げがあったのです。

「私が、えものをとれないようにしているのだ。赤石（あかし）の海の底にある真珠を取ってきて、私に祭ってくれたら、淡路島のえものを残らず取らせてあげよう。」

天皇はさっそく、淡路の海人（あま）を大勢集めて、赤石の海へもぐらせました。けれども海が深くて、だれ一人底までもぐることができません。

「だれかもっと深くまでもぐれるものはないのか。」

「申し上げます。阿波国（あわのくに）の長村に、男狭磯（おさし）という海人（あま）がおります。この人は、他の海人の倍ももぐれるそうです。」

「では、すぐに使いを出せ。」

こうして、阿波の国から男狭磯が呼び寄せられました。男狭磯は、さっそく腰に長いなわを結んで、海にもぐってゆきました。

しばらくして浮かび上がってきた男狭磯は言いました。

「この海の底に、とても大きな光るアワビがある。だが深すぎて、とてももぐれそうにない。どうしたものか。」

「それこそ神様のおっしゃる真珠にちがいない。なんとか取れないものかな。」

「どうかして神様を喜ばせてあげたいものだ。」

「だがさっきもぐったので、もう五十尋（ひろ）もあるぞ。これ以上はとても無理だ。」

船の上にいる人々は、口々に言いました。

男狭磯は迷いました。が、やがて決心したように海へ飛びこみました。なわはぐんぐんのびてゆきます。四十尋、五十尋……。やがて六十尋もこえようとしたところで、ぐいぐいとなわを引いて、男狭磯から合図がありました。

「それっ、引っ張れ！」

船の人たちは、必死になってなわをたぐり寄せましたが、ようやく海面についたとき、男狭磯は息が絶えてしまっていました。

けれども男狭磯のうでは、見たこともないほど大きなアワビがしっかりとだかれていて、その中から、桃の実ほどもあるみごとな真珠が見つかったのです。

天皇はさっそく、イザナギ神社に真珠をお祭りしました。すると、神様のお告げの通り、たくさんのえものをとることができました。けれども天皇は、男狭磯が死んでしまったのがくやまれてなりません。そのころ海人というのは、身分の低い人たちでしたが、天皇は男狭磯のために、赤石の海を見わたせる山の上に立派な墓を造り、ていねいにとむらいをしたそうです。石で造ったこのお墓は、だれ言うとなく「石の寝屋（ねや）」と呼ばれるようになりました。

紀行「石の寝屋古墳とその周辺を訪ねる」

明石海峡を渡る



岩屋港

明石港（あかしこう）からフェリーに揺られること20分あまり。明石海峡大橋（あかしかいきょうおおはし）のアーチを抜けると、岩屋（いわや）の浜とその背後にある緑の山が迫ってくる。常緑樹が繁る山は、里山の雑木林を見慣れた目にはまぶしい。それを眺める間に、漁港の突堤のわきを通過して、船は岩屋港に到着した。

岩屋港は、淡路（あわじ）と本州を結ぶ航路の拠点の一つとして、古くから栄えた港である。明石海峡大橋が開通した今でも、本州と淡路島をつなぐ港として、往来は少なくない。漁港特有の香りを感じながら、石の寝屋古墳（いしのねやこふん）を訪ねた。

石の寝屋古墳

少し変わった名前がつけられた古墳は、おそらくかなり昔から知られていたのだろう。伝説では、海人（あま）である阿波（あわ）の男狭磯（おさし）の墓だと伝えているけれども、「寝屋」という名前は男狭磯とはあまり関係がなさそうだから、ひょっとするとかつては、何か別のいわれがあったのかもしれない。

港から岩屋の町並みを西へたどった所にある、「石の寝屋古墳」という看板から、矢印のとおり細い坂道を登る。古墳は、淡路島を南北に貫く山地が、明石海峡に面する最北端の尾根の上にある。かつてはその山頂まで山道がのびていたそうだが、今は淡路縦貫道によって尾根が大きな切り通しになっていて、高速道路をまたいで橋が架けられている。

橋の手前までは車でも入れるが、ここからは徒歩で行かなければならない。橋を渡ったところからが、難行苦行の開始である。尾根までは延々と続く階段である。息を切らせながら登るにつれて、背後に明石海峡から大阪湾への雄大な風景が開けてくるのを振り返り、感嘆しながら上り詰めると、緩やかに起伏する尾根の上をたどる細い山道が待っている。

雑木や笹が、時折視界をさえぎる道を、ひたすらまっすぐに歩く。途中、道がわかりにくい所もあるが、方向を変えずに歩かねばならない。10分ほど歩いたところで、しだの間から顔を出している、ひと抱えほどの石が目についた。その右手から裏へまわると、石室がある。

石の寝屋古墳の横穴式石室は、すでに天井石が落下して、かろうじて石室の壁の一部を見られるのみである。石室の入り口は、明石海峡よりやや東、現在の岩屋港付近に向いているようだが、草木が繁茂した今では、ここからの眺望はほとんど望めない。

まだ発掘調査がされていないため、詳細は不明と言わざるを得ないが、古墳時代後期に造られたものであることは間違いない。伝説にあるような海人の墓であるのかどうかは、何とも言えないけれど、海峡付近の海に深い関わりを持っていた人が葬られているという推測は、うなずけるものがある。

巨大な橋が架かり、行き交う船の姿もずいぶん変わったであろう。その光景を見たら、墓の主は何と言うだろうか。



石の寝屋古墳

石の寝屋古墳
(横穴式石室)

名寸隅（なぎすみ）の 舟瀬ゆ見ゆる 淡路島 松帆の
浦に 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩焼きつつ
海人娘女 ありとは聞けど 見に行かむ よしのなけれ
ば ますらをの 心はなしに 手弱女の 思ひたわみて
たもとほり 我れはぞ恋ふる 舟楫（かじ）をなみ

（笠金村（かさのかなむら）『万葉集』巻6 935）

石の寝屋古墳から
岩屋の町を望む石の寝屋古墳から
明石海峡を望む

岩屋の浜から松帆の浦へ

岩屋の浜から松帆の浦までの道沿いには、いくつもの文化財が点在している。

石屋神社

港から十分ほど南へ歩くと、式内社の石屋神社（いわやじんじゃ）がある。海に向かって建つ本殿には、國常立尊（くにのとこたちのみこと）、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊（いざなみのみこと）といった、国産みの神が祭られている。絵島明神（えじまみょうじん）という別名のとおり、すぐ近くの海に絵島が浮かんでいる。

絵島

海に浸食されたがけに、少し橙色（だいたいいろ）をおびた岩脈が露呈した絵島は、ちょっとした奇観である。国産み伝説にある「おのころ島」は、この絵島であるとも伝えているが、島の夕景は、それを真実ではないかと思わせてくれた。『枕草子（まくらのそうし）』にも「島は、八十島。浮島。たはれ島。絵島。松が浦島。豊浦の島。まがきの島」としてあげられている。



絵島



絵島(夕景)

絵島
(淡路国名所図絵)絵島
(英文 日本の漁師の生活)

大和島

絵島の南には大和島（やまとじま）という小島もあるが、こちらは、島内の特異な植生が天然記念物に指定されている。

千鳥なく 絵島の浦に 澄む月を
浪にうつして 見る今宵かな
(西行)

岩屋城跡

絵島を見下ろす山の上には、岩屋城跡がある。戦国時代に、織田（おだ）・毛利（もうり）が戦ったときの拠点の一つでもあり、羽柴秀吉（はしばひでよし）の攻撃を受けて陥落した城である。今はただ深い森が、城跡を覆い、繁茂した草で、城跡までの道をたどることはできなかった。



岩屋城(港から)



岩屋城遠景

伊弉諾神宮



伊弉諾神宮(参道)



伊弉諾神宮(門)



伊弉諾神宮(拜殿)



参拝

伊弉諾尊、伊弉冉尊を祭る社はいくつもあるが、淡路市多賀（たが）にある伊弉諾神宮（いざなぎじんぐう）は、延喜式内社（えんぎしきないしゃ）であり、淡路国一宮でもある。縁結びの神社としても有名で、そのせいもあってか、境内には巨大な夫婦（めおと）クスがあり、県の天然記念物に指定されている。岩屋からは少し遠いが、訪ねてみたい宮である。

伊弉諾神宮
(淡路名所図絵)

夫婦クス

岩屋台場群と松帆浦

江戸時代の終わり、岩屋の浜に沿っていくつもの台場が築かれた。台場というのは、大砲を設置した一種の要塞である。外国船を打ち払うために設けられたこれらの台場は、一発の弾を撃つこともなく開国を迎え、いまではそのほとんどが往時の姿をとどめていないが、もっとも北西にある松帆台場（まつほだいば）だけはよく保存されている。



松帆台場跡



松帆台場跡南の築港跡

現在は神戸製鋼所の用地内になっているが、ことわれば見学はできる。かつて13門の砲をそなえたという台場跡には、石垣や土塁が保存されている。台場の背後には、岩盤を深く掘り込んで築かれた、海への水路が設けられていたが、その存在を示す池が、現在も神戸製鋼所の門外に残されている。

松帆台場のあたりの浜が、有名な「松帆の浦（まつほのうら）」である。



松帆浦

松帆浦
(淡路国名所図絵)

来ぬ人を 松帆の浦の 夕風（ゆうなぎ）に 焼くや藻汐（もしお）の 身もこがれつつ
(藤原定家 『新勅撰和歌集』)

用語解説

【岩屋港】いわやこう

本州、淡路、四国連絡の要地として、江戸時代から港の工事がくり返しおこなわれたが、風波が厳しいため挫折も多かった。現在のような港ができたのは、昭和10（1935）年のことである。

岩屋港からは、淡路島の東岸を縦貫する国道28号線がのびており、明石海峡大橋開通後も、フェリーが本州との間を結んでいる。また岩屋漁港は淡路町の漁業産業の中核で、タイ、タコ、イカナゴなど、瀬戸内を代表する海産物が水揚げされている。

【御食国】みけつくに

日本古代から平安時代まで、天皇や皇族の食物のうち、海水産物を中心とした副食物を献上した国の総称。

【尋】ひろ

日本古来の長さの単位。1尋は約1.82m。

【石の寝屋古墳】いしのねやこふん

淡路市岩屋小字サセブの山頂に所在する。この山頂には合計8基の古墳があり、「石の寝屋」と呼ばれるのはそのうちの1号墳である。墳丘がほとんど流出して、横穴式石室が露出しているが、石室自体も崩壊して天井石はすべて落下している。北東方向に開口する石室は、現状で長さ5.3m、幅1.3m、高さ1.3mほどの規模とされている。

他の古墳は、1号墳から南西に離れた位置にある。正式の調査がなされていないため、詳細は不明であるが、2号墳からは6世紀後半の須恵器が採集されており、1号墳もこれと大差ない年代のものと推定できる。

『日本書紀』などの記述によるならば、允恭天皇（いんぎょうてんのう）は5世紀前半の人であり、古墳の年代とは100年以上の年代差があることになる。従って考古学的には、伝説を鵜呑（うの）みにするわけにはゆかないだろう。しかし古墳の数が少ない岩屋周辺にあって、明石海峡を望む位置にあることから、これらの古墳が海と深い関わりをもつ人物を葬ったものであるという推測は、許されるのではないだろうか。

【絵島・大和島】えしま・やまとしま

絵島は、岩屋港の東に浮かぶ島である。『枕草子』にも、「島は」と記されているほど、古くから知られた名勝であったようだ。砂岩が浸食されてできた奇観であるが、この岩盤はおよそ1500万年前に、砂や礫（れき）が水中に堆積してできたものである。

その奇観のためか、国産み神話の「おのころ島」を、この絵島にあてようとする説もある。古来より名勝として人々に親しまれており、月見の名所として『平家物語』に出てくるなど、風光明媚な場所として多くの文学にとりあげられている。

絵島の頂上には、平清盛が大輪田泊を修築した時に、人柱にされようとした人たちを助け、自らが人柱になった松王丸の供養塔といわれる宝篋印塔（ほうきょういんとう）が建っている。近年は、毎年、中秋の名月の夕べに、「絵島の月を愛でる会」がおこなわれてにぎわう。

絵島の南には、陸続きの小島があり、大和島と呼ばれている。山上にはイブキ群落があり、兵庫県の天然記念物に指定されている。

【岩屋城】いわやじょう

岩屋城は、慶長15（1610）年に淡路を領有した池田輝政が築城し、家臣の中村主殿助に守らせた。岩屋港付近を望む、標高31mの台地上にあり、徳川氏が大坂の豊臣方を包囲するための拠点であった。

慶長18（1613）年に、由良成山に新城が築かれる際に岩屋城は取り壊され、新城の資材とされたため、城としての生命はわずか3年であった。石垣の大部分は、後に岩屋港の築造などに用いられたという。

【伊弉諾神宮】いざなぎじんぐう

淡路市多賀に所在する延喜式内社で、淡路国一宮とされる。祭神は伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊（いざなみのみこと）。『日本書紀』では、伊弉諾尊は幽宮（かくりみや）を淡路に構え余生を過したとされ、社伝では本殿の下がその陵墓としている。例祭は4月20日から3日間おこなわれ、淡路の春を代表する祭りとして多くの人でにぎわう。1月15日の粥（かゆ）占神事や季節ごとの湯立神事など古代からの神事も継承されている。また縁結びの神様としても有名で、神社では数多くの人たちが結婚式を挙げる。

【岩屋台場群と松帆台場】いわやだいばぐんとまつほだいば

1853年のペリー来航以来、海防の強化を余儀なくされた幕府は、淡路島の防衛を徳島藩に命令。淡路の由良、洲本、岩屋などに台場が建設された。松帆から岩屋にかけての海岸線に、5か所の砲台（台場）が完成したのは、1863年ごろのこととされている。

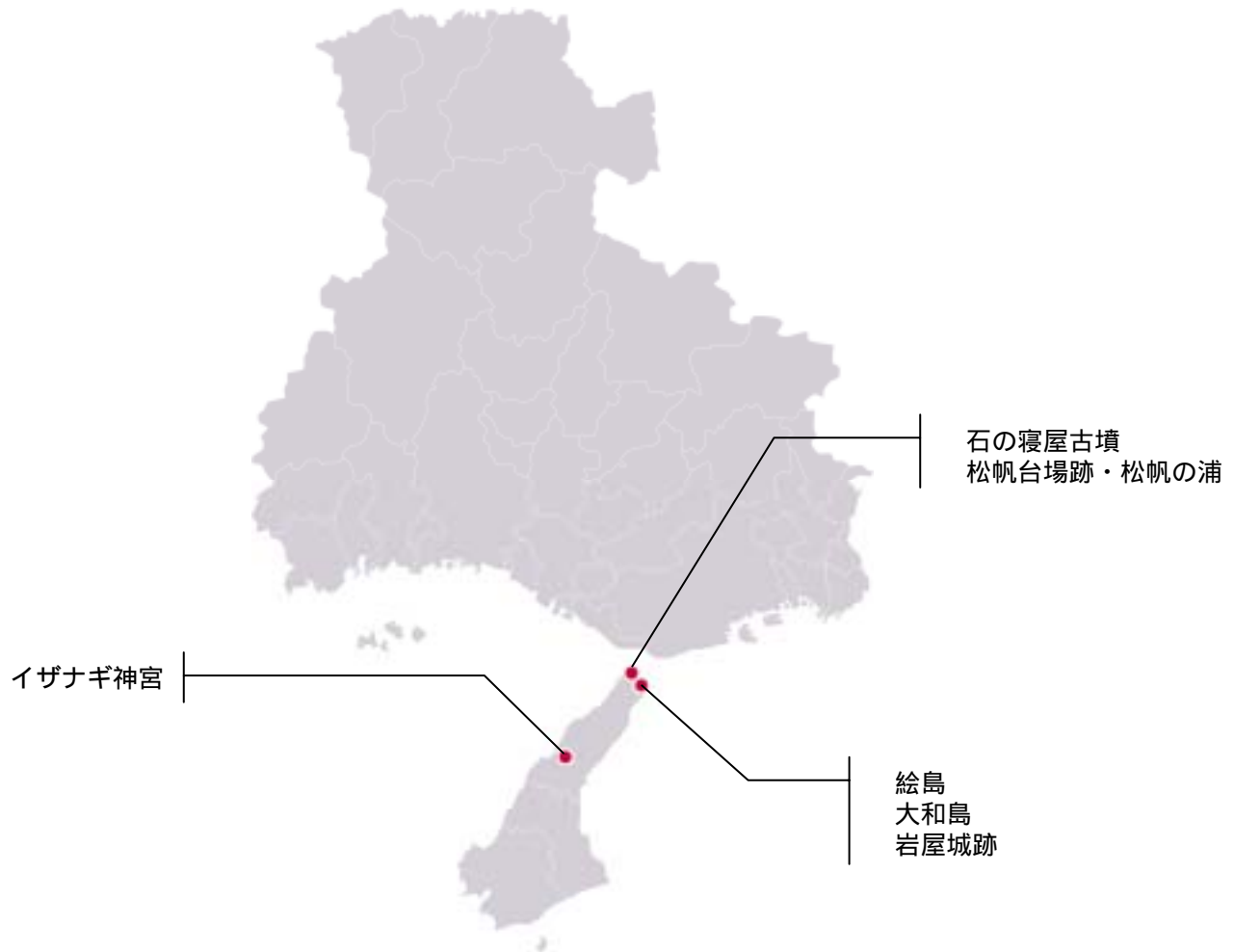
最大の台場は松帆に置かれた。M字形の台場が海に突出し、当時最新式の80ポンド砲4門を含む、13門の砲が備えられた。松帆台場の背後には、小型船が停泊するための港を設ける計画で開削がおこなわれたが、港口が風波によって破壊されることが度重なり、結局断念せざるを得なかった。このほかに、岩屋古城台場、龍松台場、拂川台場、松尾台場が置かれ、常時70人の兵が駐在したという。

1863年7月に、幕府の軍艦朝陽丸を誤って砲撃するという事件があったが、いずれの台場も実戦には使用されず、明治維新後に取り壊された。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話淡路篇	1972	郷土の民話淡路地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫のふるさと散歩 6. 淡路編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
歴史・文化等	日本思想体系1 古事記 枕草子・紫式部日記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	日本古典文学大系19（枕草子）	1958	池田亀鑑・岸上慎二・秋山 虔 校注	
	兵庫のふるさと散歩 6. 淡路編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県史 第3巻	1978	兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
	増補改訂国史大系 日本書紀前篇 允恭天皇14年の条	1981	黒板勝美編	吉川弘文館
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	檀本誠一・松下勝	保育社
	淡路町誌	2005	淡路町	淡路町

所在地リスト



石の寝屋古墳	淡路市岩屋サセブ
絵島	淡路市岩屋
大和島	淡路市大和島
岩屋城跡	淡路市岩屋
イザナギ神宮	兵庫県淡路市多賀740
松帆台場跡・松帆の浦	淡路市岩屋字松帆1825-41 ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日